

「まちづくりセンター10周年企画」  
「まちセン御三家に聞きました！」

函館とともに歩んできた函館市地域交流まちづくりセンター。2007年4月開館以来、多くの方に支えられおかげさまで10周年を迎えることができました。

10周年を記念する企画として、函館の市民活動とまちづくりセンターにスポットをあて、3編構成にて、みなさんにご案内します。10年を振り返る過去編(前々号)、函館の今、現在編(前号)、これからの函館、未来編をお届けします。



開館以来、10年まちづくりセンターを支えてきたスタッフ3人(丸藤競(センター長・写真中央)、横内輝美(左)、

澤田石久巳(右)に、聞きました。

スタッフに求めるもの！

**丸藤** 指定管理業務が10年、20年たつてくると、単なる就職先として入ってくる人が出てくる可能性があります。NPOというのを掲げて、活動しているんだから、先人たちが築きあげてきたことを考えて活動したり施設運営をしていかないと、将来違う方向に行ってしまう。

指定管理や委託を受けた人たちは、最初のころは、哲学があり、その哲学に基づいてプログラムを考えて、事業をやったりして、組織の運営をしてきました。

ところが、10年、20年たつてくると、哲学もなくてプログラムもなくて、単なる仕事としてやっています。それでは役所がやっているよりもっとクオリティが低くなるし、もっと安い値段段でやらされます。そうなる、安くて、クオリティが低いものしかできなくなります。それは、よくないですよ。

様々な分野に対し、提言できるものをもつた上でいろいろな活動をしていかないね。

**横内** 根本的な論議がされていないのと一緒に、このまちづくりセンターの基本はどこなんだろうなって、常に話していかないとけないのかな。

**丸藤** 基本的な知識は持っていてほしい。それは、各人が自分自身で気がついて、そうかと思ってもらうしかない。

**澤田石** センター長が話したように、

志||基本的な部分を我々はもつともつと勉強していかないとね。まちづくりセンターは志のあるような人を見つけながら修正をしていって、従来のスタートした時のものを重ねて、重ねていってそれを長い伝統にして、我々がいなくなつてもそれが伝統で残る。いいところだけが残る。そうするとより一層いい方向に向かつていくので、盤石なまちづくりセンターになると思います。

才能の引き出し方・・・

**丸藤** 若い人たちに対しても支援ができる体制を整えていく必要がある。そのためには、基本的な知識のベースがないとできない。若い人たちはものすごく可能性があるので、その可能性をどうやって伸ばすかが大切です。

人の持っている可能性には無意識と意識があり、アイデアや優しさなどの才能は、はじめは無意識の中にあることです。無意識の中にあるということ、本人も気がついていない。そこに何らかの形で光を照らすと無意識から意識するようになり「やるぞ」と自分から動くようになります。

どうやって無意識の中にあるすごい要素をすく上げていくかという、それは一方的な命令とか指示では逆効果なので、促すような会話や質問をしていって、本人に気づいてもらうのが効果的です。

これからは無意識の中にある才能にスポットライトを照らせるように、コーチングの基本のようなのもスタッフが

学ぶ必要があると思います。

**澤田石** いろんな方と接触すると体感の中であるほど！ということがなんとなく、自分自身で気づきますね。

**丸藤** 人から命令されたら、やりたくないけど、自分で気がついたらやっちゃってます。そういう風な促してみたいのができる施設になっていきたいですね。難しいですけど。

**横内** 促すときには、一緒にやんなきゃね！

10年後の自分にひと言

・体に向けていってください(丸藤)  
・みんなに挨拶をしてもらえる人になりたい(横内)  
・志がある若者を育てたいし、若者の役に立ちたい(澤田石)

あとがき

今号で、10周年記念企画「まちセン御三家に聞きました！」は、終了です。函館の市民活動とまちづくりセンターにスポットをあて、約1年かけて、10年前から、10年後の未来までを話してきました。いかがでしたか？感想をお聞かせください。

(聞き手 谷口 真貴)

これまでの10年、これからの10年、同じ情熱で！

これからもまちづくりセンターをよろしくお願ひします。